

人権作文集

ひかり 2022

第 34 集



公益社団法人 大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

この人権じんけん作文集さくぶんしゅう「ひかり」という名な前は、

日本にほん最初さいしよの人権じんけん宣言せんげんと言いわれる水平すいへい社しゃ宣言せんげんの

「人ひとの世よに熱ねつあれ、人間にんげんに光ひかりあれ。」

という言こと葉ばからとつたものです。

まえがき (児童生徒のみなさんへ)

この人権作文集「ひかり」は、県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童生徒のみなさんが、人権について、日ごろ思っていることや感じていることを作文として書いたものを集めて作りしました。

本当にあったことをもとに、おかしいと思ったことや感じたこと、はらが立ったこと、そして、よくしていきたい、いっしょにがんばりたいと思ったことが書かれています。

筆者の多くは、自分からおかしいと思うことをかえていこうと行動しています。すべにかわらないことでも、おかしいと声を出していくことをわすれてはならないと思います。

また、まわりのなかまからはげまされ、ささえられたことで、勇気を持つことができたり、安心できたりしたけい

けんや、なかまとつながることの大切さをつづった作品も多くありました。この作文集を読んだみなさんにもたような体けんをしたり、感じたりすることがあると思います。自分と同じ考えだと思ったり、ちがう考えだと思ったりすることもあるのではないのでしょうか。作品の中には、気になる言い方や考え方をしているものもあります。友だちや先生・おうちのひと、感想を出し合ってほしいと思います。

先生方へ

大分県人教の出版物では「障害」「なかま」という表記を用いていますが、本書では、できるだけ提出していただいたままの文言で表記するにとりました。

題 名	校 種	学 年	なまえ	*視点	ペー ジ
ことば	臼杵市 小学校	1	村松 玲央	なかま	1
本当かたしかめて	豊後高田市 小学校	2	きよはら みこと	自分	3
りおんの成長	日出町 小学校	3	黒木 りおん	自分・なかま	5
どうして約束やぶったの	竹田市 小学校	3	藤川 彩音	なかま	7
なかよく遊ぶために	日田市 小学校	3	大庭 丈	自分・なかま	9
『ふみきり向こう』で考えたこと	豊後高田市 小学校	5	酒井 心湖	差別	11
自分らしく生きる	豊後大野市 小学校	5	桑島 叶帆	自分	13
「個性」は大切	玖珠町 小学校	5	川野 真優	なかま	15
自分の経験を通して思うこと	中津市 小学校	6	K・Y	自分、なかま	17
運動会で考えたこと	竹田市 小学校	6	飯田 瀬	くらし・なかま	19
傍観者になった自分	津久見市 中学校	2	中野 苺萌	自分・なかま	21
三年間の部落問題学習を通して	豊後高田市 中学校	3	二宮 誉彰	差別・偏見	23
差別について	竹田市 中学校	3	吉岡 愛	差別	25
様々な力タチのオリンピック選手	豊後大野市 中学校	3	西山 未来	なかま・くらし	27
流されるということ	久大地区 高等学校	2	赤峰 希ノ花	自分	29
ぼくのお姉ちゃん	久大地区 高等学校	2	横山 創大	差別・家族	31
性に対しての人権	中津地区 高等学校	3	橋内 円空	差別・偏見	33

*視点について

「自分・家族」「なかま」「くらし・生きる」「差別・偏見」の4つの視点で分類しました。

い と ば

臼杵市 小学校 一年

村松 玲央

「ねんせいはい、とてもげんきいっぱいです。やすみじかんはともだちとサッカーをしたりおにごっこをしたりしてあそんでいます。でも、ときどきかなしいことをいってしまうひとがいます。」

「うっせえ」

「クス」

「うめえ」

「ガキ」

などのことばです。このことばをきくと、ぼくはかなしくなります。いわれたともだちもかなしそうなおをしています。こんなことばをクラスからなくしたいな、とみんなではなをしました。

みんなで、いわれたらうれしいことばについてかんがえました。

「だいいじゅいぶら」

「あしたもいっしょにあそぼう」

ぼくは、きょうともだちになんてこえをかけようかかんがえました。

「あしたいっしょにサッカーをしよう」

「あしたいっしょにけしぐむおとしをしよう」

2 人権作文集 ひかり 2022

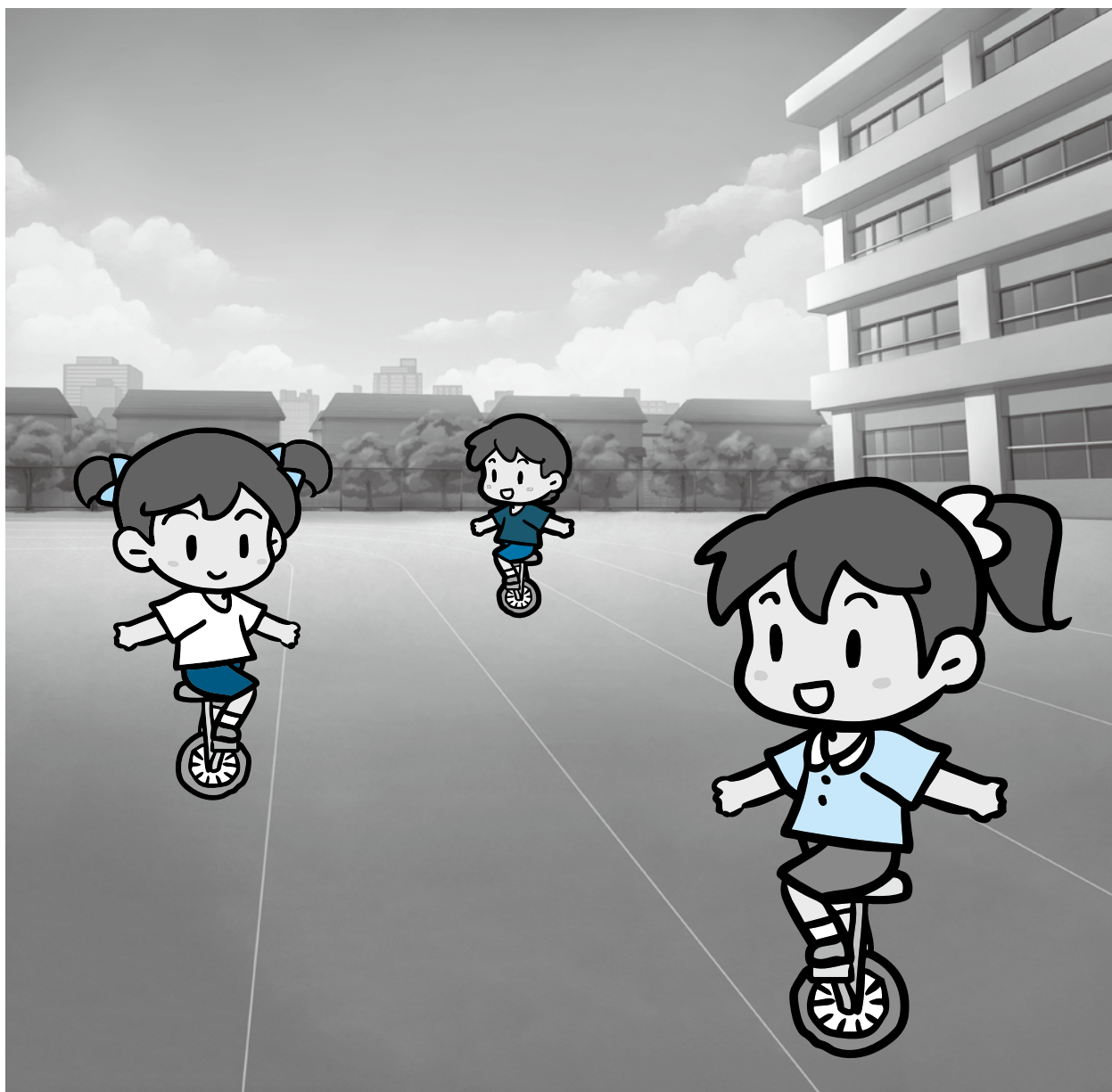


本当かたしかめて

豊後高田市 小学校 二年

きよはら みづ

わたしは、「どろどろ村の子どもたち」を学しゅうしました。ためき村のポンキチたちがされたように、わたしも、本当かわからないのに、きめつけたりうたがったりしたことがあります。休み時間にりりん車小屋で、りりん車をえらんでいました。だれかが、わたしのりりん車とにているりりん車をとっていたので、「わたしの、うらたて」「どろどろ」って、とりあげました。わたしは、あやまろうと思ったけど、ゆるしてへねるかぶあてい、「うらあげい、どろめえね。」が口から出ませんでした。でも、こんどからは、きちんと「見せて。」「どろどろ」ってかたしかめたほうがいいなと、心から思いました。





りおんのせい長

日出町 小学校 三年

黒木 りおん

「楽しくて 助ける人になりたいな」

これは、私が考えた人けんひょう語です。

なぜこのひょう語を考えたかというところ、助ける人が、いいなあ、すごいなあ、と思ったからです。

今までの私は、お友だちにぼう力をふるっていました。イヤなことを言われると、おこって、すぐ友だちをたたいたことがありました。おこっている時の私は、イライラして、何かにあたらないと気がすまない感じでした。

でも、今の私はちがいます。前は、おこることが多かったけど、今は少なくなりました。それに、自分が悪いと思ったら、先にあやまるようになりました。友だちから、

「やい近りおんちゃん、やさしくなったね。」
と言われると、うれしい気持ちになります。

なんでこんなふうにかわったのか考えてみると、一つは、イライラした時に、「どうぞのいす」にすわると、先生が話を聞いてくれるからです。先生が、紙に、私がしたことを書いてくれます。一番おこっていることを書くとき、ちょっとだけすっきりします。そのあと、自分が悪かったことに色ペンで丸をつけます。そうしたら、すなおに

「ごめんなさい。」

と言えます。そうすると、友だちも

「私も、悪いこと言って、ごめんね。」

と、あやまってくれます。

「ごめんね。」と言ったり、言ってもらったりすると、二人ともニコニコになって、かい決できます。

もう一つは、私のことをわかってくれる友だちが、ふえたことです。じどう館で、ケンカをしたことを話し合っている時に、Mちゃんが、

「だって、りおんちゃん、小さい子がいるから、がまん

してるもんね。わかるよ。」

と言ってくれました。私は、めちゃくちゃうれしくなりました。

そして、私もMちゃんみたいに、やさしくて、人の気持ちができる人になりたいな、と思いました。

じゅぎょう中、Kさんが、わからなくてこまっていたので、私が、

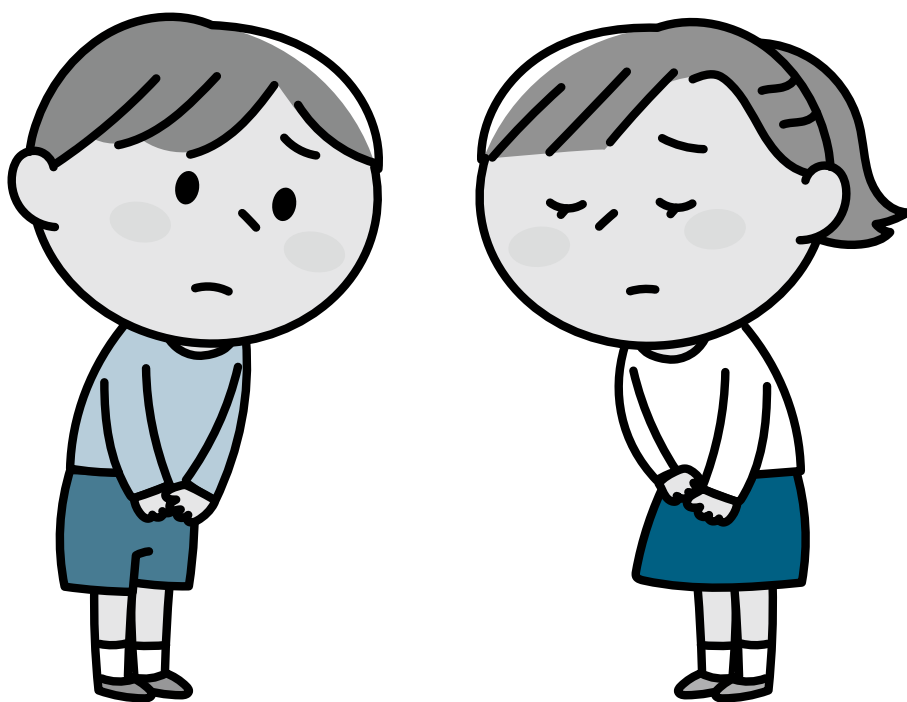
「ここに書くんだよ。」

と教えてあげたら、にこっとわらって、

「ありがとう。」

と言ってくれました。私は、うれしくなって、いいことをしたなあ、と思いました。

相手がえがおになったら、わたしも楽しくなります。人けんひょう語に書いた「楽しくて、助ける人」になれるよう、これからもがんばっていききたいです。そして、自分をもっともっとせい長させていきたいです。



◆◆◆自分の気持ちを伝える大切さ◆◆◆

竹田市 小学校 三年

藤川 彩音

「じいじやぐそくをやぶったの」

休み時間に他の友だちと遊んでいると、いつも遊んでいる友だちに、とつぜん、うでを引っぱられ、強い□調でそうせめられました。わたしはやくそくしたおぼえもなく、びっくりした気持ちやいやな気持ちになりました。強い□調で言われたこわさや、話し合いをしても何か言われるかもしれないという不安もありました。だから、はつきり自分の気持ちを伝えられず、自分が悪いことになってしまいました。その後、「言えはよかった。」と後かいました。

別の日の朝、同じ友だちにろう下ですれちがって「ちょっとまって。」

と声をかけられました。わたしはいつも、その子の朝のしたくを手伝っています。また手伝わされると思っていて、

「おはよう。」

と返して、すぐにその場をはなれました。しかし、

「なんでむしするの。」

とせめられました。それから、先生とその子と三人で話し合いをしました。その時、わたしは朝のしたくなど自分でできることはしてほしいことや、いつも手伝いをたのまれていやだった気持ちをはっきり伝えました。それから、少しずつ自分の気持ちを伝えられるようになりました。

このけいけんから、友だち同士でもいやな時は自分の気持ちをはっきりと伝えることが大切だと思いました。わたしは気持ちをはっきり伝えた時、自分の心の中のもやもやがスッキリしました。それから、毎日友だちとなかよく遊べるようになりました。

わたしは、これから相手の気持ちを大切にできる人になりたいと思います。自分と同じように、気持ちを伝えられず、もやもやしている人がいると思うからです。もし、近くになやんでいる人がいたら、話をしっかり聞いてあげたいです。

なかよく遊ぶために

日田市 小学校 三年

大庭 丈

ぼくたちのクラスはみんなで十一人です。中休みや昼休みは、みんなでよくおにごっこやドッジボールをして遊びます。楽しく遊べる日もあるけど、けんかになる日もありました。と中で遊びをやめる人もいました。そこで、クラスでなかよく遊ぶためにみんなで考えを出し合いました。

まず、今までのごまりをみんなで出しました。「おにごっこでタッチしようとしたらバリアする。」「遊びのルールがと中でかわってしまふ。」「タッチしたのにしてないと言われる。」「おにの人に向かってあおってくる。」など、ごまりがたくさん出ました。

ぼくは、おにごっここの時に、おにをあおってしまったことを思い出しました。おににタッチをされそうな時にバリアを使ってしまったこともありました。ぼくは楽しくても、人をきずつけたり、悲しませてしまうことがあることに気づきました。だから、あおったりバリアは使ったりしないようにしようと思いました

みんなでごまりを出し合った後、どうしたらよいかみんなで考えました。ぼくも自分で考えたことを発表することができました。

話し合う中で、クラスではごまりがかいけつしないことがありました。それは、遊んでいる時に上級生がじゃまをしたり、ボールをけつてきたりすることです。そこで、代表委員会をお願いすることにしました。

先生が、

「だれか代表委員会に出てくれる人？」

と言ったので、僕は一番に

「はいっ。」

と手をあげました。みんなのために意見を言いたいと思ったからです。でも、一人だとふあんなので

「二人がいいです。」

といったら、そうまくんも手をあげてくれました。

代表委員会は、二人で出たのでときどきしませんでした。一年生からじゅん番に言っていたけど、こまりがいつしよだな、と思って聞いていました。

ぼくたち三年生も、そうまくんといっしょにクラスのコまりを伝えました。ちゃんと伝えることができてよかったです。

さいきは、よくドッチボールをして遊んでいます。みんなわらいながら楽しく遊んでいます。ぼくもあおりをしないようにいしきしています。そして、それをつづけていきたいと思います。

上級生も、代表委員会で伝えてからは、じゃまをしなくなりました。よかったです。

これからも、こまったことがあったらみんなで話し合い、伝えていきます。



『ふみきり向こう』で考えたこと

豊後高田市 小学校 五年

酒井 心湖

「みなさんが、サヨの友だちならどうしますか？」

先生が、『ふみきり向こう』の勉強で、私たちにたずねました。私は、ドキッとしました。サヨは『ふみきり向こう』に住んでいる事で差別をされています。無視やからかい、仲間はずしをされています。『ふみきり向こう』に住んでいる事で、どうしてそんな風に差別されるのか腹が立っていました。

しかし、先生から『ふみきり向こう』にサヨが住んでいることを知らされたとき、私ならどうするかをたずねられると、サヨをかばい味方になってあげられるか迷いました。サヨの友だちのように距離を置くかもしれないと思いました。「言い返したい」「サヨをかばいたい」という気持ちと同じくらい、「サヨと同じように差別をされたら、イジメられたら怖い」と思ったからです。

グループで考えを出し合ったとき、私以外の人は、サヨのために言い返すと発表しました。一人だけちがうことを言ったら「おかしい」「差別やねえ？」と、言われるかもしれないと不安になりました。しかし、

勇気を出して伝えると「分かるよ」と最後まで聞いてくれてホッしました。でも、私は「差別してしまうかも、そんなに強くなれない。」と思っていました。

次の時間のめあては「サヨとサヨの友だちを仲なおりさせよう」でした。「仲なおりなんてできるの?」
 と思っていました。だけど先生が、

「じいちゃんの前で、あやのちゃんが泣いていたら、差別されていたらどうする?」

と、言われて気がつきました。もし私なら、「困っている友だちがいたら助けるし、一緒に解決したい、差別をなくすには、相手のことをよく知ればいいということだ。」と思いました。

『ふみきり向こう』の学習で、差別は、よく相手のことを知らないのに、うわさやきめつけでおこることが分かりました。私は仲良しの友だちや大人が言うことを信じて差別してしまうかもしれないという自分にも気がつきました。そして、自分の身近な生活の中にもちよつとした差別があることにも気づきました。だけど、仲直りをして差別をなくす方法をみんなで考えることで、もっとみんなが仲良くなれた気がしました。

これから私は、いろいろな人に出会っていきます。一人ひとり、顔も性格もちがいます。好きな人も好きになれない人もいると思うけれど、うわさやきめつけをしないで、相手の事を理解できる大人になりたいと思います。

自分らしく生きる

豊後大野市 小学校 五年

桑島 叶帆

「おい、そのぼうず！こっちにくわ持って来て。」

「はい？私ですか？」

「あつ、ごめんな。女の子やったんやな。」

総合的な学習の時間の活動の一つ、植樹の手伝いの時の出来事です。

私は、かみの毛は短いです。服装もどちらかというとスカートなどは好きではなく、Gパンや動きやすい服が好きです。色もピンクなどの女の子が持つような色はあまり好きではなくどちらかというと、黒や青などのシックな色が好きです。持ち物もキティーちゃんやすみっこぐらしなどのキャラクターよりも、あまりみんなが持つ

ていないデザインの物を持っています。

2才上の姉は、スヌーピーやチップとデールなどが好きです。かみの毛は長く、かみどめや、ゴム、リボンなどでおしゃれをよくします。スカートも好きでよくはいています。私とはぜんぜんちがいます。でも、似ているところもあります。怖がりだったり、負けずらいだったりするところです。

最近は、一緒にメイクやおしゃれについて二人で話をしたり、色ちがいの服を買ったりしています。でも、好きな物はちがうところが多いので、時々かえっこして使ったり、着たりもします。

低学年の時に、私は友だちとしゅみが合わず話が合わず、悩んだ時がありました。その時に、ほしくないけど、無理をして、キャラクターのものを買ってもらいました。でも、うれしくなかったし、持っても楽しくなかったです。その時に母から、

「かほが好きな物を持てばいいし、やりたいことをやればいいと思うよ。かほはかほ！そのかほのことが好きで、かほと居ることが楽しいと思ってくれる人と出会う

し、その人と居ればいいよ。かほはかほ！無理して自分にうそをついたらダメよ。」

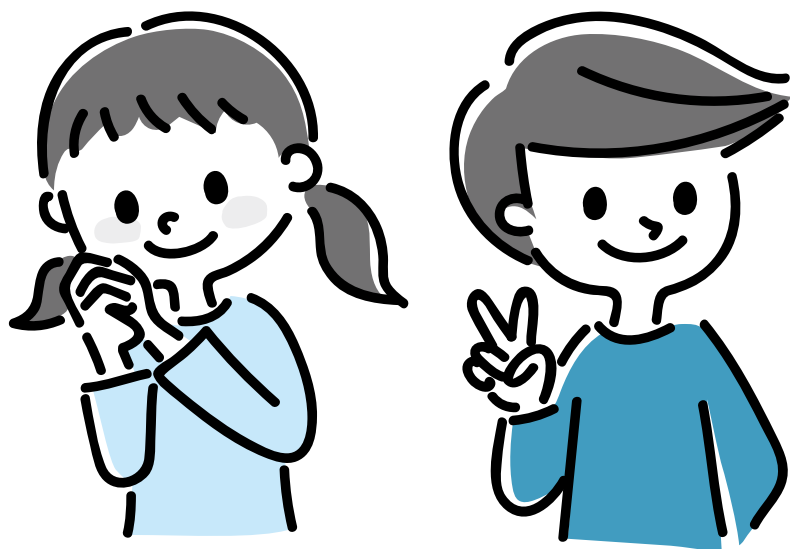
と言われました。それから持ちたくないものは無理して持たないようにしました。自分の着たい服を着る。したい髪型にするようにしました。

でも、大人の一言で傷ついたり、「やっぱり女の子らしい服や髪形にしないきゃダメかな・・・」と思う時もあります。見た目で決めつけるのはちがうと思います。「女性らしさ」「男性らしさ」ということが、必要な時もあるし、体のつくりがちがうからそれぞれにしかできないこともたくさんあります。でも、「男だから」「女だから」というのはちがうと思うこともあります。それぞれが、性別にとらわれなくて、自分自身を大切にし、お互いを思いやる心を持つことが大切だと思います。

人はみんな顔もちがうし、体型もちがう。性別もちがう。住んでいるところも、感じ方も、声も、考え方も、好みもちがう。それぞれにちがいがあり、それぞれを認め合いながら生きていくことが大切だと私は思います。

人の心の中は見えません。どれだけ楽しんでいるか、

笑っているか、思っているのか、悲しんでいるのか、傷ついているのかは周りの人には見えません。だからこそ、私は自分自身を大切にし、そして、周りの人の心を大切にし、見た目で決めつけずに、みんなが自分らしく生きていける時代になるといいなと思います。



「個性」は大切

玖珠町 小学校 五年

川野 真優

私は、道德で「権利の熱気球」という学習をしました。

いくつかの権利の中から自分が大切だと思うものを選んでいくという学習でした。たくさん権利が出てきましたが、その中でも私は「みんなと異なっているところを認めてもらえる権利」や「いじめられたり、命令・服従されない権利」の2つが特に大切なのではないかと考えました。

「みんなと異なっているところを認めてもらえる権利」が大切だと思った理由は、一人ひとり好きなものや嫌いなもの、得意なものや苦手なものが違うと思ったからです。私のクラスも一人ひとりが違って個性があるか

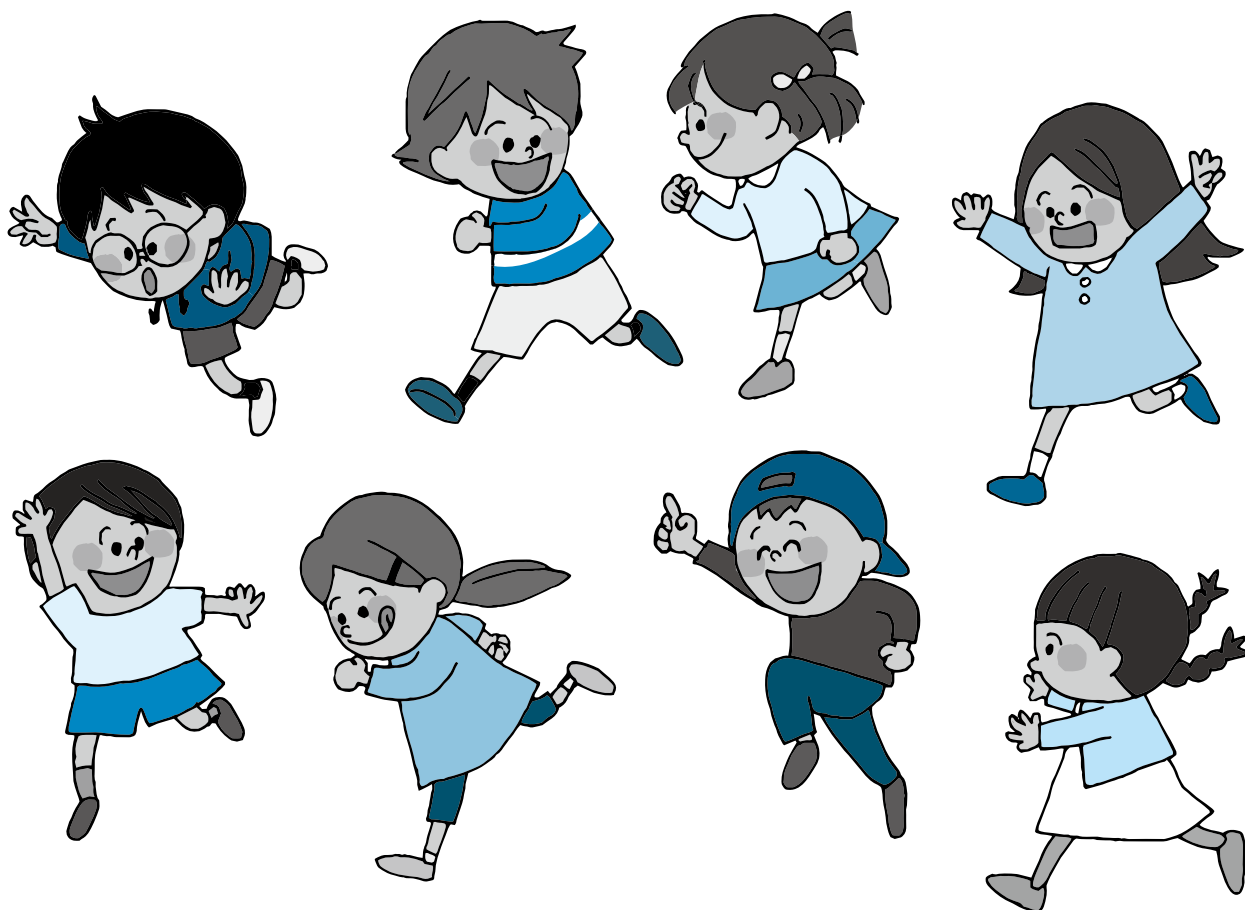
らこそ、楽しいことが起こるのだと思います。もしこの権利がなければ、みんな一緒にでなければならないということになります。つまり、みんな同じ服・同じ食べ物・同じ考えでなければならないのです。もしみんなが「同じ」になってしまったら、話し合うこともできません。もし、みんなが間違ったことを考えてしまったとき、それを見直したり、正しくしたりするチャンスもありません。とても恐ろしいことだと思いました。

「いじめられたり、命令・服従されない権利」が大切だと思ったわけは、この権利があることがとても幸せだと感じたからです。この権利がなかったら、いじめられても、嫌なことを命令されても我慢するしかありません。私たちが自由に考えたり、自分が正しいと思う行動ができなくなることはとても怖いことだと思いました。日本は、「いじめられたり、命令・服従されない権利」が認められていると思います。でもニュースなどを見ると他の国では、それが認められていないところもあると知りました。だから、自分がしたいと思うこと・正しいと思うことを、思い切りできることはとても幸せな

ことなんだと感じました。

今回の学習を通して、「人権を大切にする」というのは、きつと「違いを認め合う」ということなんだと思いました。学習の中で、自分が大切に思う権利について友だちと話し合う場面がたくさんありました。友だちと考えを比べてみると、それぞれが大切にしたい権利が違い、その理由も様々でした。自分と違う友だちの考えを聞くことは、とても勉強になったし、楽しいと感じました。何より私の考えを友だちに聞いてもらえたとき、「なるほど」とうなずいてもらえたとき、とても嬉しくて心が温かくなりました。こんな気持ちをこれからも感じたいし、私の身の周りの人にも感じてほしいと強く思います。だからこそ「違いが認め合える」関係であるために、「みんなと異なっているところを認めてもらえる権利」や「いじめられたり、命令・服従されない権利」は大切にしていきたいと思いました。

これから私たちはたくさんの人と出会うと思います。そんなとき、出会う人たちとの違いを大切にし、楽しみながら過ごしていきたいです。



自分の経験を 通して思うこと

中津市 小学校 六年

K・Y

私は、三年生のときに、ちょっとしたいじめを受けました。そのとき、引っこしたばかりで相談できる友だちもいませんでした。

いつも仲良くしていた友だち三人が、急に態度が変わり始めて、「死ね」や「キモイ」などいわれるようになりました。一人の子が悪口をいっても、まわりの子は止めてくれず、笑いながら「やめなよー。」と言っているだけで、私は「なんで助けてくれないの?」と毎日思っていました。いじめをしてくる理由もわからず、「この前まで仲良くしていたのに」と悲しい気持ちでいっぱい

でした。

夏休みが終わって、もう無かったことのように接してきて「意味わかんない」と、ずっとモヤモヤしていました。

二学期に入ると、悪口を言ってきた中心の子が、私とその時仲が良かった子を見無視してくるようになりました。それがきっかけで、その子とは話さなくなり、他の友だちと仲良くするようになりました。

五年の初め、いじめアンケートがありました。私は友だちも多くなり、毎日が楽しかったので、過去のことには書きませんでした。

ある日の昼休み、となりのクラスの先生に、私と他の友達三人が呼ばれ、悪口を言ってきた子と話し合いをする事になりました。何を言われるかと思うと、過去に悪口を言ってきた子が、逆に私たちに無視されると書いていたのです。なぜか私たちが悪いかのように話し合いが進められ、せっかくの話し合いの場で自分の気持ちを伝えることができませんでした。

「私は無視したつもりはなくて、あの子が急に無視する

ようになったと思っていただけ、あの子は逆だと思っていたのかな。もっと向き合って話せばよかったのかな。」と頭が混乱していました。すると、その子が教室に来たので、私が、「私は無視したつもなかなかかったけど、そう思うような態度をとってごめん。」とあやまると、「私こそ、あの時すごくいやなこととして本当にごめん。」とあやまってきました。長い時間がかかったけど、この時やっと仲直りができたと思います。「もっと早くこうすればよかったな。」と思いました。

つらい経験をしたからこそ、いじめはなくなっしてほしいと思い、それと同時にそれでもいじめはなくならないんだと思いました。今も全国には、いじめでなやんでいる人、もう死にたいと思っている人がたくさんいると思います。たとえ「ごめん」と仲直りしても、心についた傷は一生消えません。それは、いじめを受けた側も、いじめをしてしまった側も同じことです。

だから、私は、自分自身がされたことをほかの人に傷つけないから、ちょっとしたでも悪いことをしたなと思ったら、すなおに「ごめんね」とあやまり、なやん

でいる友だちがいたら手を差し伸べられる人になりたいです。



運動会での疑問

竹田市 小学校 六年

飯田 瀬

ぼくは道德の時間に、男女差別について考えました。授業をする前は男女差別というものをあまり知らないし、考えたこともありませんでした。

ぼくのクラスは男子2人、女子2人の4人のクラスです。9月に行なわれた運動会では、まず団長を決めました。団長は、「ぼくと女の子の1人」の2人がすることになりました。この時点で6年生の組み分けは、男女のバランスを考え必然的に決まってしまいました。その時

ぼくは、「どうして男子と男子、女子と女子では同じ組になれないのだろうか?」と思いました。ぼくたち4人のなかでは、ほとんど力の差はないと思います。ですが先生たちは、あたりまえのように組を決めてしまいました。



授業中にみんなと話し合う中で、やはり男子と女子のバランスを考えてチーム決めることはおかしいという意見がたくさん出ました。「男だから」「女だから」といつて分けるのではなく、平等に見て力の差で分けてほしかったと思います。

ぼくはこの授業を通して、常に男女差別をなくすためにはどうしたらよいかを考えて行動できる人になりたいなと思いました。そしてみんなが男女差別をなくしていく意識を持ち、みんなが平等に生きることのできる世の中になってほしいです。





傍観者になった自分

津久見市 中学校 二年

中野 菫萌

私は昔から人見知りで、人に何も注意ができず、いつもずっと見ていました。こんな自分が私は嫌いです。でも今回ばかりは、違います。このままではダメだと思い、勇気を出して言おうと思いました。でもやはりなかなか言葉が出てこなくて、見過ごしてしまいました。

私の学校の同級生のAさんは中学に入ってからとも変わりました。自分の気に入らないことがあると機嫌が悪くなり、同級生に当たってしまいます。私の友だちのBさんは何もしていないのにAさんから悪口や嫌がらせを受けていました。私はこの状況を見て、注意をしようとは何度も思いました。でも、声をかけることができず、その場から逃げてしまいました。今度こそ逃げないと思っていたのに。

その後、状況が悪化していき、クラスで話し合いになりました。私は声をかけることができなかった自分を振りかえり、とても申し訳なくなりました。

話し合いが終わって何日かたったある日、Bさんが学校に来なくなりました。私はとても心配になり、先生に理由を聞きました。やはり、Aさんのことがあって、そのことが原因で来なくなってしまったと聞かされました。私はどうしたらBさんが来れるようになるのかを考えました。私だけでは力が足りないと思い、親や友だちに相談をたくさんしました。先生にも相談しました。すると、「Bさんを一人にしないであげて。できるだけ一緒にいてあげるといいと思うよ。」と言われました。そうしたら少しずつ悪口を言われなくなった気がしました。私はすごくうれしかったです。私は少しは役に立てたのかなと思いました。みんなもだんだんと注意してくようになりました。少しクラスの団結力が上がりつつあると感じるので、この調子で頑張ろうと思います。

Bさんは何があっても人には言わず自分の心の中でずっと閉じ込めてしまつてことがあります。私が「何かあった？大丈夫？」と聞くと必ず「いや何もないよ」と言います。

私はAさんの気持ちがよく分かります。私も自分の中

で解決しようとするところがあるからです。私の場合はすべてため込んで、ストレスで一杯になってしまい爆発してしまいます。ご飯が食べられなくなり、ドライヤーをしていたら髪が抜けてしまいます。こんな辛い思いを大切なBさんにしてほしくないから、なんとか解決策を見つけないと思いました。Bさんが元気がなさそうだったら声をかけるようにしたり、話を盛り上げたりしました。そうするうちに、Bさんは少しずつだけど、笑顔が増えていきました。私はよかったと思いました。Bさんの方から話しかけてくれたり、笑わせてくれるようになってきたのです。それが感じられた時私はとてもうれしかったです。私の思いが通じた気がしました。

私は自分が変わったことをみんなに知ってもらいたいと思っていました。Aさんみたいに、そして私みたいに自分の中で何でも解決しようとして、無理をしてしまう人を少しずつでも救いたい、そんな思いから作文を書くことにしました。一人で悩んでいる人、辛いって思っている人は、少しでもいいから周りを頼ってほしいです。きっと誰かが見ていると思うのです。私がAさんを助けたい力になりたいと思っていたように、きっとその人の周りには支えたいと思っている人がいるはずです。そのこと

に気づいてほしいです。

でも頼ることは、実はとんでもなく高い壁があって、簡単には越えられないことも私は知っています。本当に頼れるのか、こんなこと言って大丈夫なのか、嫌がられないか、さらには文句を言われないか。いつも不安で胸が張り裂けそうになることを、私は知っています。だからこそAさんを救いたかったのです。私がいるよと伝えなかったのです。

学校に行く権利、勉強する権利、そして安心して教室で過ごす権利を私たちは平等に持っています。私も新しいことに対する不安が強くて、辛いことがたくさんあります。

でも、いつも先生や周りの友だちが教えてくれたり、支えてくれたりして、何とか過ごすことができます。困った時は助けてもらおう権利があるのではないのでしょうか。そして、困っている人を助ける義務があると思うのです。

私はAさんに関わる中で少し勇気が持てたと思うのです。教室が、辛いと思う人を支えたいと思う人であれば、いの場所であってほしいと思います。私はこれからもその中の一人でいたいと思います。

三年間の 部落問題学習を通して

豊後高田市 中学校 三年

二宮 誉彰

僕たちは中学校三年間、部落問題学習にとりくみました。初めての部落問題学習「ふみ切り向こう」、平成二十八年十二月施行「部落差別解消推進法」、これらのことから、住む場所などから生まれるどうしようもない差別を許してはいけないということを学習しました。でも、この学習で、「部落差別ってこのくらいのことなんだ。」そう思った自分もいました。確かに差別はいけないこと、だけど「このくらいは…」と思っていました。しかし、この学習から三年間、たくさんの部落問題学習を通して、考え方や部落差別への思いがだんだんと変

わっていきました。部落差別は、絶対にしてはいけないことだと今は思います。

部落差別とは、自分たちでは解決できない理不尽でどうしようもできない差別です。部落差別はよくないこと、でも最近、それに少し当てはまるのではないかと思う言葉があります。それは、「親ガチャ」という言葉です。今年の流行語大賞にノミネートされていて、テレビでよく耳にします。「親ガチャ」のとは、「生まれたときのお父さん、お母さんは選ぶことができない、ガチャのようだ。」という意味です。普通に考えれば、「親ガチャ」はあまりよくない言葉だと思います。しかし、テレビやインターネットなどで、「親がどのくらい稼いでいるかで将来、子どもはこうなっている。」といったデータの表やグラフを見ることがあります。すると僕は、やっぱり「親ガチャ」ってことなのかなと思うようになってしまいました。「親ガチャ」は、部落問題と違い、差別はされていません。でも、僕がもし部落差別を受けていたら、「こんなことおかしい。」と思う前に、「どうしてここに生まれたのだろう。」この思いが正直、最初に出てきま

す。でも、「全国水平社創立」の学習でその考えが変化しました。山田少年が、今まで学校や友だちに差別された話や涙で一日が終わる日があったという話をたくさん人の前で訴えたところです。悲しみを打ち破ろう、光に輝く世の中にしようという呼びかけ、少年が呼びかけている姿を見て、生まれてきた場所で自分の将来が決まるわけではなく、自分から行動することで自分にとって明るい将来がやってくると思います。部落問題学習を通して、「親ガチャ」に対しての考えも変化しました。

三年間、部落差別について学習して、どうしようもできない差別を許してはいけない、あつてはならないものだと思います。私たちのクラスの人權目標は、「一・相手がどう思うか想像して接する。」「二・正しいことは何かを考えて行動する。」「三・互いの良さや個性を認め合う。」です。もうすぐ僕たちは、高校生です。進学した場所、これから働いていく場所でも、おかしいことはおかしいと声を上げ、差別のない明るい未来になるように、自分から行動していききたいです。



差別について

竹田市 中学校 三年

吉岡 愛

二〇二〇年は新型コロナウイルス感染症が大流行した年でした。私の母は、大阪で仕事をしていました。大阪は、とても感染者が多く、緊急事態宣言も他の県よりも早く出されていました。母は大阪市内の保育園で働いていました。母の保育園でも、感染が広がらないように、保育園の中ではたくさんの対策をしていたようです。

私は母と離れて大分で暮らしていました。母から話を聞きながら、大阪での生活はとても大変だと感じ、心配して過ごしていました。あるとき、近所の人から、「お母さんは、コロナにかかったんでしょ。」といううわさのようなおたずねをされました。母は、「コロナに感染していないのに、まるで感染したかのように言われて、

ショックで私の心は傷つきました。うわさで傷つく思いをする人がいなくなる社会がつけられたらいいな、と強く思いました。

そのとき、私は、これまでの自分の言動をふり返りました。自分をふり返ったときに、うわさを信じて、そのうわさで友だちと会話することはなかったかな、と心配になりました。もし、うわさばなしを聞いたとしても、そのうわさを信じてうのみにするのではなく、自分で見たもの聞いたものを信じる強い心をもちたいです。

全国のコロナ感染者数が毎日報道されているけれど、感染者数が多い都道府県から、感染者数の少ない都道府県に必要な移動をしたときに、感染者数の少ない都道府県の人たちはすごくいやな言葉を口にすることが多いということも知りました。私は、そんな言葉を聞いて、とても悲しいです。けれど、私も、母が大阪で働いているので、母が用事で大分に帰ってきたときには、近所の人や、学校の友だちに内緒にしたい気持ちでした。私自身にも、悪気はなくても、偏見の思いがこみあげてきました。そんな風に思う私は、他の人に「お母さん、大阪か

ら帰ってきたの。」といやがられるのではないかと思い、内緒にします。でも、よく考えたら、そんな思いで内緒にしているということは、私もコロナに感染した人を特別視しているのと同じではないかと思いました。そういう気持ちが差別を生むのではないかと気づきました。そういうことからひとつずつ、強い心をもっていかなければなりません。

今年の七月から開催されたオリンピックを見て気づいたことがあります。開会式において、さまざまな国、人種の人たちの行進を見ました。今、世界では、人種差別の撲滅運動が強化されているけれど、去年、白人の警察官が黒人に暴行して、死亡させてしまうという事件があったとニュースで知りました。それらを見るかぎり、まだまだ差別は続いているんだなと感じました。オリンピックでは、どの国の人も皆、同じ人間どうし、尊重しあえているのに、どうして肌の色や目の色・国籍で差別するのだろう。アメリカでの差別のニュースは、とても小さく、なさけないものだと感じてしまいました。

私は、目の色や肌の色・国籍で差別することなく、相

手を尊重する気持ちで接していきたいと思います。そして、いろいろな差別を見たり、感じたりしたときは、注意できる人間になりたいです。そして、私自身差別しないようにしていきたいです。

今、私が生きているこの社会は、どのような社会だろうか。新型コロナウイルス感染症が世界的に大流行して、緊急事態宣言やまんえん防止措置等も、たくさん出されています。「自粛していない。」という理由で責められたり、やむをえない用事で県外に行ってもひどいことを言われたり、差別されたり、ひどいコロナ差別をされた人は、一生心に傷を負います。そんな社会はもういいです。私が大人になっているころには、差別などなく、世界中の人に、みんなが笑顔で明るい未来になってほしいと思います。私も、社会をつくる一員として、強い心をもってがんばります。

様々な力タチの

オリンピック選手

豊後大野市 中学校 三年

西山 未来

今年の七月二十三日から開催された東京2020オリンピック期間では、連日、関連したニュースが放送されていました。皆さんの印象に残っているニュースは何でしょうか。選手入場でゲーム音楽が使用されたこと、日本が過去最多のメダルを獲ったこと、もしくはそれぞれの種目で記憶に残るプレイがあったかもしれません。私にはそのたくさんの中のニュースの中で一際目を引かれたものがあります。そのニュースとは、オリンピック史上初めて、男性から女性へ性別変更を公表したトランスジェンダーの重量挙げの選手が女子選手として出場するというものです。つまり身体的には男性として生まれ、しかし心や思考は女性だという人が性転換手術を受け、女性選手としてオリンピックに出たのです。その選手は試合に出ると批判され、他国選手団から出場資格の取り消

しを求められたそうです。女性の権利を主張するニュージールランドの団体は、「男性」が女性の機会を奪っていると批判し、出場に反対しました。他にも、人生を変えるチャンスを手放してしまうアスリートもいるなどその選手の東京オリンピック出場に対する様々な反対意見がありました。私も最初にこれを聞いたとき

「たしかに、この選手が出場することで出場できなくなる女性選手もいるのか……それに男性の身体をもつ人が女性選手と競うというのはどうなんだろう……。」と思いました。ですので、出場反対派だったのかもしれませんが、皆さんは、その選手の出場に対してどう思いますか。私のように反対する人はいるでしょうか。

ですが、私の意見が覆る出来事がありました。それは私がこの作文を書くにあたり、その選手について調べていたときのことです。私はとある記事を見つけました。記事には記者の「なぜ重量挙げという競技を始めようと思ったのか」という問いに対してその選手がラジオで語ったことが書かれていました。

「男っぽいことに挑戦すれば私も男になれるのではないかと思った。だが、残念ながらそうはならなかった。思惑通りにいけば、人生で最も暗かったあの時期が多少なりとも過ぎやすくなるかもしれないと思ったのに。」というものです。私はこれを読んではっとしました。その選手がオリンピックに出るまでにどれくらいの壁が

あったのか、ということを感じ取ったからです。初めの「男っぽいことに挑戦すれば私も男になれるのではないか」これからはその選手が男性としての生きづらさを感じながらも、必死に心を身体に合わせようとしてもがいてきたことがわかります。きっと、親や周りの人たちは、男として生まれたその選手が当然男として生きることがを期待していたと思います。そしてそのごく当然の期待に選手が応えようとし、男っぽいことに挑戦していったのだと考えます。ですが、結局三十代で性転換手術を受けることになるのです。

私の中にも自分に対して、「○○なんだから当然こうあるべきだ、こうあるはずだ」という固定観念がありますし、皆さんにもあると思います。○○の中には、例えば、女子という言葉や、最上級生、最近だと受験生、という言葉が入ってきます。それらが支えになることもあります。ですが、時にプレッシャーになることも私はありました。そんな時に私ならば友達や先生に心を聞いて素直に話すことができます。ですが、その選手の場合はどうでしょうか。自分の性に対する悩みを乗り越え、自分に素直になって「自分らしく」女性として出場すると、その「素直さ」が多くの人に批判されるのです。それはどれだけ辛いことだったでしょうか。

そして、この選手は一度引退しています。その時に「私のような人間のために作られたわけではないに違いない世界に自分を合わせなければならぬプレッシャーが大

きすぎて耐えられなくなった。」と語っています。これを聞いてもまだ反対をする人がいるのでしょうか。その人のことを決めつけることで、その人を生きづらくさせてしまっていることに気づいていますか。たしかに、私が始めに考えたようにその選手が出場することで、女性選手が出場できなくなったり、メダルがとれなくなったりするという考えもあります。また、女性選手なのに男性の身体を持つているのはどうか、という意見もあるでしょう。しかし、その選手は女性選手として出場するために、先ほど述べたような性転換手術を受けたり、男性ホルモンの血中濃度を下げたりといった努力をし、国際オリンピック委員会が定めた条件をクリアしています。ですので彼女は、女性選手です。女性の心をもって生まれた人が数々の壁やハードルを乗り越えて、身体も女性になったのです。私は今なら何の問題もないと自信をもって言えます。

これから、私たちは偏見や差別によって生きづらさを感じている人が過ごしやすい環境、そして周りに安心して公言できるような環境をつくっていかねければなりません。そのために、トランスジェンダーの人々への偏見を少しずつでも減らしていくことが必要です。私も含めた皆さんの中にある小さな偏見をなくしていきましよう。

流されるついでにと

久大地区 高等学校 二年

赤峰 希ノ花

クラスに一人はいるなぜか権力を持つ人。

そんな人に意見を合わせたり、ひどい場合は「いじめ」に加担して、見て見ぬふりをしたことはありませんか？。

私は小学校の時に転校した学校で何度も流されてしまったことがあります。初めての場所、初めての環境に戸惑いながらも、どんどんなじんでいきました。そんな時に気付いたのは、いつも一人にいる女の子でした。私

は話しかけようと思いましたが、「みんなが話していないから」、「私も一人になったらどうしよう」という思いが勝ってしまい、そんなつもりではないのに、その小さな「いじめ」にのってしまったのです。そして、女の子は「つらい」と学校に来なくなり、何度もクラスの話し合いをしていました。私は正直に言うと、自分の力で来れるだろうくらいしか思っていませんでした。

でも、ある日私はいつも一緒にいる人たちと喧嘩をしてしまい、移動教室は一人で行動することになりました。たった二日間程の喧嘩でしたが、「一人」は相当辛く、周りが友だちと楽しそうに行っている中、笑うことなく黙々と行動している時間はとても長く感じました。私はそこでやっと女の子の気持ちを理解することができました。そして私は、その女の子に渡す連絡袋にみんなから

のメッセージを集めて入れることを始めました。すると、気持ちが届いたのか少しずつ学校に来るようになりました。学校に来た時には周りに流されず、たくさん話しかけたり声掛けをしたりを、一人で続けました。そんな姿を見て、友だちも女の子に話しかけてくれるようになり、女の子は私に「ありがとう」と伝えてくれました。その言葉を貰えた嬉しさと達成感で胸がいっぱいになりました。

私は周りに簡単に流されてしまうことを知ったし、なにより「一人でも逆らい続ける人がいれば良い方向に流れる」ということも知ることができました。私はもっとその逆らう人が増え、少しでもおかしいと思える人が増えればと願っています。



僕のお姉ちゃん

久大地区 高等学校 二年

横山 創太

姉と一緒に町やショッピングモールを歩いていると必ずじろじろこっちを見てきます。私はそのことが悔しくて苦しくてたまりません。ですが、もっと苦しい思いをしているのは姉の方だと思います。

なぜかというと、私の姉は障がい者だからです。自由に動くこともできず、話すこともできません。ですが、いつも私たちに笑顔をくれます。

なのに世の中には、障がい者に対する差別や偏見など

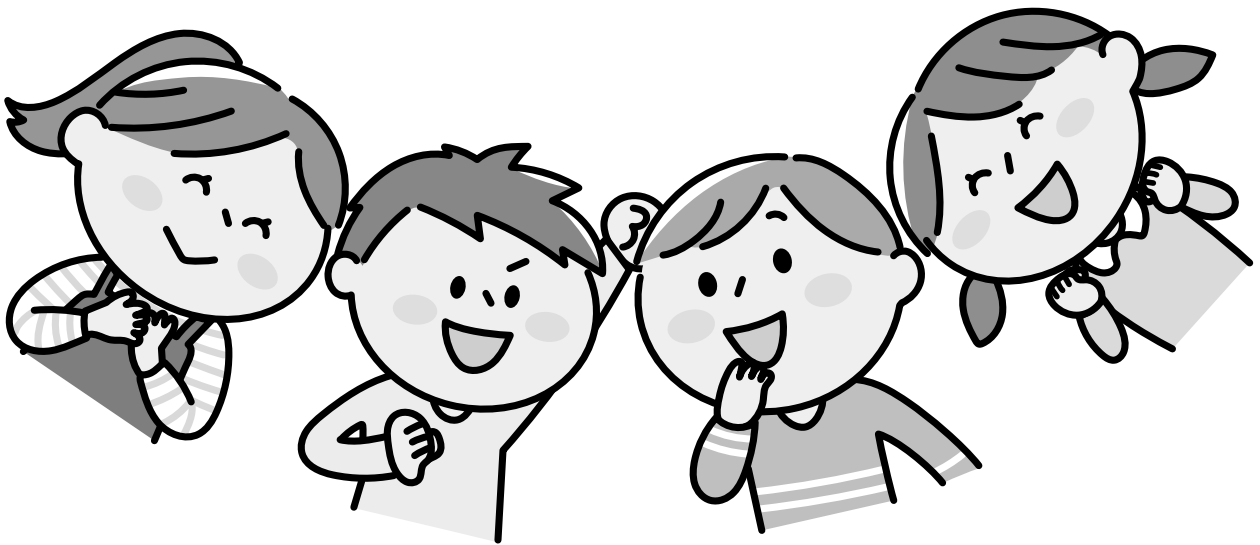
があります。「障がい者だから」「なにあいつ」「このような言葉を何度聞いてきたことでしょう。」「私たちの思いも知らないのに」「姉は障がい者になりたくてなったわけではないのに」と考えれば考えるほど思いがこみ上げられます。その中で私たちが一番嫌いな「ガイジ」という言葉が追い打ちをかけるように飛び交うのです。この言葉は本当に大っ嫌いです。このような言葉が一つでもいいからなくなれば、世の中は変わると思います。

先にも書いたように、町などを歩いているとよく見られます。「あのひとおかしくね」「ヤバイわ」などよく耳にします。障がいがあってもなくても人間なのです。障がい者という枠にはめられていて、自分の好きなこともできないという姉の気持ちを皆さんはわかりますか。それは姉にしかわかりませんが、私たち家族は今まで過ご

してきたので、少しは理解できます。私は「少しでもいいから当たり前前の生活を送ってほしい」「毎日一緒に過ごしたい」と思っています。ですが、叶いません。それが現実です。

このようなことを私は皆さんに知ってもらいたいです。どんな気持ちで生活をしているのかを考えてもらいたいです。私はこの世から「偏見」や「差別」、「ガイジ」という言葉がなくなり、人間みんなが楽しく過ごせる社会になることを願っています。

お姉ちゃん、いつもありがとう。



性に対しての人権

中津地区 高等学校 三年

橋内 円空

私は五歳くらいの頃、母に「なんで女の子に産んでくれなかったの。」と言ったことがあります。私は子どもの頃から自分の男という性別が好きではありませんでした。私はハートや星、フリルなど女の子らしいものが好きでした。しかし、自分が男であることを理由に、そういったものに手を出し気味悪がられることが怖く、憧れだけが強くなっていきました。今思えば、トランスジェンダーのようなものだったのだと思います。

私は小・中学生の頃、何度か自分が男なのか女なのか悩んだことがあり、そのたびに「オカマ」と呼ばれまし

た。前述の気味悪がられることが怖いというのはこの経験からです。

私が変わることができたのは高校に入学してからです。私の友だちはとてもやさしく、LGBTに対しても理解がありました。その友だちと交流する中で幸せな気持ちになった出来事、というか、言葉があります。私は高校では苗字をもじって「はっしー」と呼ばれていたのですが、「はっしーの性別ははっしーだね。」とってもらえたことでした。この嬉しさは誰にも伝わらないと思えるほどにあたたい言葉でした。この言葉は十数年間私が悩んでいたものの答えなのだと気が付きました。性の多様化が進んでいるこの時代は大きな問題を抱えています。それは何十年、何百年かけて作られた大きく、凝り固まった意識です。

私の両親にも私の性の意識に対しての理解があり、友だちにも支えられ思いっきり考えることができました。私の性の問題に対しての答えは男〇、女〇、その他では

なく、一人一人の人間として捉えることが大切であると
考えています。私の性に対しての人権問題は決して暗い
ものではなく、環境に恵まれた幸せなものでした。私は
私という人間に誇りをもって生きています。すべての人
が性に対しての人権に理解を持つことのできる意識改革
が必要だと考えています。



あとがき

この人権作文集「ひかり」は、本来子どもたちとともに考えあつていくことを目的に編集され、日常的に活用されることを期待して作成されました。

子どもたちをとりまく社会が、ますます厳しくなっている現実があります。その社会の中で、子どもたちが、様々な気持ちを感じたり、新しい気づきを生み出したりしたことを、自分の言葉で綴っています。その思いを受けとめてほしいと思います。たくさん子どもたちがこの作文集と出会うことを願っています。

また、教職員自身も子どもたちの思いを知り、日常の生活の中で、具体的な事実を通して、様々な矛盾や不合理、差別を見抜き、憤り、これから解決しようとする子どもたちの姿に学んでいた

きたいと思います。

残念ながら、応募された作品のすべてを掲載することはできませんでしたが、作文に取り組んだ子どもたちや、その指導に当たられた教職員、選定いただいた各地の担当者や編集委員など、多くの方々に厚くお礼申し上げます。

二〇二二年 三月

公益社団法人

大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

